

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

2015年(平成27年)4月16日 木曜日

無料

第35号

毎月発行

創刊2015年(平成27年)4月16日 木曜日

5年目以降の東北復興とは？ 東北が自己革新を！ このままでいいはずはない ではどうすればよいか

この四年間の復興総括

もう終わってしまった四年間、最初から最後まで不満足に終始した復興作業の四年間という時間は、どんなに嘆いたところで戻らない。また、過去の足跡をただ反省するだけでは何も生まれないし、むしろ後悔することで、前進するエネルギーが減退するだけである。そんなことは止めよう。

ただし、未曾有の大災害で気が動転してしまい、あれよあれよという間に過ぎた四年間を、これからの五年目以降の復興に役立てるための総括は必要である。まず、すでに五年目に入ったことで、大震災直後の勢いはもう期待できない。ボランティアもどんどん減少しているし、これからの減少するのは確実である。同情も期待できない。時

間が過ぎていくうちに、他にも多くの自然災害が発生したし、人々の眼は次第にそちらに向いていくのを止めることは出来ない。復興予算もこれからは減額されるだろう。すでにその兆候は始まっている。この傾向はどんどん加速していくだろう。

そうしたことで、復興に向けての環境はますます厳しくなる。そのことははっきりと自覚すべきであり、心に刻み込むべきである。弱音を吐いてももう誰も聞いてくれない。自分の口や心から出た弱音はそのままのようにむなしく自分に返ってくるだけである。

冷静になって周囲を見渡せば、課題が山積している状況が覆いかぶさってくるだろう。

何一つ解決していないと、投げやりな気持ちに傾くかもしれない。

しかし、投げやりになつたところで、自分にそのまま返ってくるだけである。

被災地総意の再形成

この四年間、被災地の多くで、被災者同士の利害が衝突して、地域復興の基本方針が漂流を続けた結果、ただでさえ復興が進まないのに、余計に復興が遅れた状況がある。そしていまの現実がある。このままでいけば、さらに遅れていく。そして政治の無作為にいいように利用されてきた。ほんとはこれでもいいのだ

5年目以降の方針転換急務

- 大震災から5年目という厳しい状況を受容せよ
- 震災直後の勢いを期待できないことを自覚せよ
- 「東北人は良い人」を止めよう！「良い人」の看板だけでは復興は出来ないことを自覚せよ
- 周囲を見渡して課題山積の状況に負けないこと
- 弱音を吐いても同情してくれないことを受容せよ
- 周囲が変わったと嘆かないこと、4年も経てば他の自然災害と同列視されることを覚悟せよ
- 待ちの姿勢から積極姿勢へ、自助へ、自ら変われ！動け！
- 利害で分裂している場合ではない、被災地の意思を固めよ！そのための体制組み直し急務

外部人材獲得と活用

- 復興は資金優先ではなく、まず人材獲得であり、人材がすべてであることを基本に据えよ
- 東北内部人材だけで復興は無理と覚悟せよ
- よそ者復興プロデューサーを受け入れよ
- 特に若手流入を促進し、活躍の場を与えよ
- 復興のポイント、東北の魅力は東北人だけでは分からない、よそ者による東北の魅力発掘に協力せよ、素直にアドバイスを受け入れよ
- 政府資金はあてにできない、よそ者が持ち込む民間資金とアイデアによる産業創出を目指せ
- 人口流出防止は、上記転換による働き口創出に尽きる

世界の東北へ

- 東京経由という発想を捨て、いきなり世界へ
- 東北は過去に何度も世界進出を企てていることを思い出し、先人の勇気を見習え
- 「世界に紹介したい東北」を再発見せよ
- グローバル発想で遠隔地間連携を図る
- 産業で世界進出するよりも、まず「東北文化」を世界に発信せよ
- 被災地の心のケアは、世界に誇れる東北新文化創出で実現せよ
- 東北が日本から独立するほどの気概を持て

ろつか。

ここから出直すためには、「被災地民主主義」とでも名づけられるような多数決主義で乗り越えていくべきではなからうか。

徹底して話し合ったのだから、あとは多数決で方向を決するという民主主義の基本ルールを再確認すべきではないか。そして前進していくべきと考える。

この四年間で学ぶべきはまずそのことではないか。

待ちの姿勢転換

この四年間を振り返ると、「待ちの姿勢」に終始してきたのではないか。

被災地も被災者も、政治主導を棚上げするほど、積極的かつ自主的に復興をリードしてきたとは言えない。

これからの「待ちの姿勢」を継続したら、いったいどうなってしまうだろう。恐ろしい事態が見えるだけである。

転換が必要である。

復興は人材

これ以上説教じみたことを並べ立てても仕方がないので今後のことを考えよう。まず言いたいことは、これからの復興

は人材第一優先ということである。

これからの厳しい復興環境をもとめず、チャレンジ精神で乗り切っていくような人材が必要であり、それも大勢必要である。

そうした人材が各分野に分散し、あるいは連携して、さまざまなチャレンジングなプロジェクトを多数配置していくことが必要である。

わか者・よそ者誘致

ある時期に流行ったことばがある。「わか者」「わか者」「よそ者」が地域を変えよう」という言葉である。まさにその通りであり、これからの東北被災地にびつたりである。

かつて、そうした思いを胸に秘め、勇んで被災地に飛び込んだ「わか者」「よそ者」がたくさんいた。その多くは、さまざまな障害に直面して、落胆し、被災地を去ったかもしれない。しかし、もう一度呼び戻せば良いではないか。

これからの被災地には、そして東北には彼らが必要なのである。

遠隔地間連携

ついでに、何でも東北内で完結しようという頑なな発想も排除しよう。

東北と東京その他の大都市圏で役割を分担して、遠隔地間プロジェクトを発足させるのも面白い。

あるいはもつと世界規模に発展させて、東北と海外を結ぶプロジェクトもいいのではないか。

柔軟に発想し、成果を勝ち取ればよい。

東北を世界に！

従来の発想で行くと、産業も文化も、まず東京などの大都市圏に進出し、それでも勢いがあれば世界へ打って出るというステップを踏むことになるが、果たしてそれでいいのだろうか。

むしろ、いきなり世界へ打って出るのがいいのではないか。条件は揃っている。かつて、東北の雄、伊達政宗は世界を夢見て、今から四百年前に宮城の港からスペインに向け、サン・フアン・パウティスタ号を出航させた。

結果は、鎖国により支倉常長らは悲劇的な結末を迎えたが、どの武将よりも早く、世界に飛び出したのだ。それより遅れば、アテルイの時代には、青森や秋田の港を拠点に積極的に海外貿易を行っていたという可能性も指摘されている。

もつと歴史を遡れば、鉄伝来のルートが、従来教えられていたような朝鮮半島経由ではなく、カラフトから北海道経由の東北ルートもありえたという話もある。

世界との交流、通商が先人たちに出来て、現代の東北人が出来ないわけがない。

東北文化発信

海外進出というすぐ産業の進出を思い浮かべるが、東北には世界に誇れる文化があることに気づいていない東北人が多い。

祭礼など、外国人が見ためることだろう。

幕末の戊辰戦争以来しみ込んだ硬直化した頭脳を柔軟にして、東北の魅力を別アングルから再発見すれば、新たな復興の道筋もきっと見えてくるに違いない。

マイナス思考を徹底排除して、究極のプラス思考で今後の東北復興を考え直してはどうだろうか。

大震災後の宗教問題を考える なぜこの問題を選けるのか？ 3・11は日本と日本人の宗教的 欠落をあぶり出したのではないか

宗教論議は タブーなのか？

なぜかこの国では、人前で宗教の話をするのがためらわれるような空気がある。そのためか、みなこの話題を避けたがる。

原因は、少し前のカルト教団の許しがたい犯罪ゆえであろうか。それとも、特定宗教に関わる者というレッテルを避けようとしているからだろうか。原因はよく分からないが、とにかく面妖な状態である。

その一方で、たいいていの人は、積極的に信仰しているわけでもない仏教の信徒とすることにはあまり抵抗がない。そして、たいいていの家には仏壇があり、近くの寺には墓があり、葬式も



伊勢神宮内宮 拜殿

仏式である。とはいえ、その所属する宗派の教義について聞かれてまともに答えられる人は少ないだろう。神道はどうかといえ、自ら神道信奉者と言おうものなら、大した根拠もなく右翼系の人間と見なされる傾向があるように思う。

筆者は最近、全国あちこちの神社を参拝していることを何のためらいもなく人に話す、聞く側は筆者のことを右翼系の思想信条の持ち主と受け止めているかもしれない。

神道に対するこうした受け止め方の一方で、元旦の初詣には多くの人々が神社に参拝し、おみくじをひき各家々にはしめ縄を飾る。そこに何の矛盾も感じない。

現在、ヨーロッパ、中東、



鹿島神宮 拜殿

北アフリカでは、キリスト教とイスラム教、さらにはイスラム教各宗派間で大きな争いが発生し、大規模な殺人、戦争まで起きている。それなのに、日本では表向き、まるで宗教など不要とでも言わんばかりの建前ですつぱり覆われている。

3・11ショックは 既存宗教で救われたか

この問いに対し、他の大勢の人々の思いを推し量るのは困難なため、特定宗教からはフリーな状態にある筆者の経験に絞って言うが、震災発生以降、あのショックを何で受け止めたらいかに答えを探したが、なかなか見つけれなかった。いまでも見つからなかった。

また既存の宗教に答えを見つけようとしたが、なかなかむずかしかった。答えが見つかるという可能性に賭けようという気持ちも起



香取神宮 拜殿

被災直後に復活した 地域の祭礼の意味

当新聞でも何度か取り上げたが、大震災直後の被災地では、衣食住もままならないなかで、被災地住民から地域の祭礼復活の要望が多数寄せられていた。

祭礼といつても、都市部での祭礼とはずいぶん趣を異にしており、地域の神社の氏子のみによつて継承されてきた祭礼である。

被災者から復活要望を告げられた祭礼の担い手たちは、被災地のすさまじい状況を見るにつけ、衣食住確保を優先すべき状況の中で、ほんとうに復活したものかどうか大分迷ったようだ。



大神神社 御神体 美輪山



十和田神社 参道の溶岩巨石

いた地域の祭礼を、自分たちの代で途切れさせてはならないという使命感だけだったろうか。

人や地域の結びつきは他の手段でも可能だし、何も震災直後に復活させずとも途切れることはない。やはりそこにはもつと深い意味があったと断言できる。

つまり、当時はなかなか言い出しにくいことだったろうが、そこに地域の宗教があったからではないだろうか。

平時にはすっかり忘れ去っていた宗教、震災で無くして初めてその有難みが分かった宗教の復活を期したのではなかったか。

生活に溶け込んだ宗教

さらに大胆に言えばそれは、生活にすっかり溶け込み、宗教など意識もしなかった宗教ではないか。

現に岩手南部のしし踊り

はお盆の季節、位牌を供養するために各家々を回り、その家の庭で舞うのである。

あるいは、一揆の多かった岩手に残る鬼剣舞は、墓場で舞うことで亡くなった人たちと魂の交流をするのだという。

こうした宗教らしくない宗教、生活に根差し、生活の一部と化し、習慣化した祭礼と宗教の合体した形態が、いまでも東北の被災地、あるいはその周辺に残っていることは発見であった。

東北のこうした様式は一般的な祭りの様式とははつきり異なる。筆者は考えるが、なかなかその違いを理解してもらおうのは大変なようである。

それはともかく、その地点から、あらためて宗教とは何かを考えていくことは重要ではないかと思つたのである。



大湯環状列石 石柱

地域の祭礼と修験道

また、これら地域の祭礼のルーツを辿ってみると、最も古いもので平安初期あたりにまで遡る。

そして当時勃興しつつあった修験道の影響を直接受けている。というより、修験道の行者が、修験の教義を広めるため、分かりやすいビジュアルとしての神楽などの祭礼様式を用いたと解釈すべきだろうか。そのため、ほとんどの祭礼は神楽等として修験道の教義を織り込んだような様式となっていたと思われる。

しかし筆者は最近そうした様式が、修験道とともに突然出現したのではなく、それ以前の文化とコラボしたのだと思うようになった。つまり、もともとそうした様式を受容する下地があ



大湯環状列石 列柱

大同二年の壁

最初は、東北の古い神社巡りを実行した。そうすると、平安時代の始まりである大同二年(西暦八百七年)という壁にぶち当たった。

東北に限らず、古い神社仏閣で大同二年創建というものは多い。それ以前に存在していたはずの神社仏閣も創建が大同二年である。いろいろ考えた挙句、当時の政権による宗教界徹底支配確立の影響が考えられた。つまり、バラバラだった宗教をこの年に、権力でねじ伏せ、統一を図ったと考えられるのである。

とすれば、歴史の改ざんがあったと考えるのが条理であり、ここでルーツ探しの「旅」をストップし、別ルートを探すことにした。

最も古い神社探し

そんなことで、大同二年より古いといわれる神社を可能な限り回ってみた。その旅のなかで、神社のルーツを考えてみようと思った。同時にまた古来有名な神社も参拝した。

主なものは、十和田神社、篁峯寺、伊勢神社、榛名神社、弥彦神社、鹿島神社、香取神社、息栖神社の東国三社、諏訪大社などである。一番古い神社様式は、本殿がなく、山や巨石、巨木を御神体としている。たとえば、奈良の大神神社の御神体は三輪山である。

また、諏訪神社も古い形式を持つ。御柱という巨木を四隅に立てる方式で有名だが、その形は他にもある。巨木といえば、秋田の大湯環状列石遺跡にも巨木の



縄文土器 井戸尻遺跡

縄文に辿りつく

列柱があったようである。青森の三内丸山遺跡の巨大な柱跡も、何か共通性が感じられる。

古い神社様式と縄文遺跡とのつながりが見えてくる。でもそこまで、遺跡発掘遅れのため、それ以上は想像の域を出ない。ここで



諏訪神社 上社本宮御柱



縄文土器 火焰土器

旅はまだ途中

もそれ以上進めないのだ。日本人も国も、自国の古い歴史にはあまり興味がないうようにも感じられる。

あるいは、何か古い時代に遡らないように誘導する力が働いているのかと勘繰りたくなるほどである。

そこでまた方向転換し、歴史を一挙に飛び越え、縄文時代の探索を開始した。そこには原始人としての縄文人ではなく、現代日本人の直接の祖先の縄文人がいた。しかも従来の教育で

教があるはずである。その一部は縄文土器に刻まれている。しかし解読は開始されたばかりである。とはいえ、先入観を排除すれば、豊穡な世界が広がる。答えはそこにあるだろう。



諏訪神社 上社前宮本殿



渋谷



日本橋

毎度お馴染みとなりました三陸酒海鮮会はこのひと月のうちに立て続けに渋谷・日本橋開催と続きました。渋谷開催は三月十四日に第十二回目を迎えました。その三日前の三月十一日が東北震災発生から四年目にあたったため、参加者の提案により黙とうから始まりました。

また、前回好評だったミニライブも実施し、初回以上に盛り上がりました。日本橋開催は四月十日に第十一回目を開催しました。今回は新人参加も多々あり、刺激的な会となりました。オーナーから毎回、当日

供される三陸地酒の説明がありました。以前何度か紹介された、福島浪江ルーツで山形育ちの地酒「磐城寿(いわきことぶき)」が四月十二日のテレビでも取り上げられておりました。当三陸酒海鮮会でも人気の地酒で、とても親しみを感

第12回三陸酒海鮮会 渋谷開催 (3/14) 第11回三陸酒海鮮会 日本橋開催 (4/10)



渋谷ミニライブ

水産業再興のための 料理レシピ紹介

第8回目

**【塩麴サンマの南蛮漬け】
と
【ぶりのササッと昆布で
めた酒蒸し焼き】**



郷土料理愛好家
松本由美子氏

たまたま今回はお酒のつまみにぴったりのメニューとなりましたが、決して筆者の選定ではございません。とはいえ、お酒が進みそうなメニューであることはまちがいないようです。

材料と作り方(塩麴サンマの南蛮漬け)

【材料】

サンマ 3枚(塩麴につける)
人参/玉ねぎ/ピーマン/パセリ/白ごま(仕上げに)
酢 大4、砂糖大4、醤油大4、みりん大2、水180cc
(調味料は鍋に入れて火を通す)

【作り方】

- ①フライパンで塩麴で漬けたサンマに片栗粉をまぶし、両面をきつね色に焼きます。
- ②野菜は千切りにして水にさらして絞る。
- ③バットにサンマを並べ、絞った野菜をのせ、南蛮漬けのタレを熱いうちにかける。
- ④30分程で味をなじませます。仕上げに白ごまをふります。



塩麴サンマの南蛮漬け



ぶりのササッと昆布

作り方(ぶりのササッと昆布でめた酒蒸し焼き)

【作り方】

ぶりに塩をふり、昆布を濡らしてめておきます。小麦粉を軽く振って、フライパンで焼き、仕上げに酒をふります。塩は好みで味付け。

【ポイントアドバイス】

昆布は4~5時間でした。この昆布の残りは味噌汁かお澄ましに・・・ぶりのだしが効いています。水菜も残りの油でササッと炒めると飾りにも映えますし、美味しいです。(松本談)

お酒のおかずだけでなく、ご飯のおかずにもいいですね。ご飯のおかわりが進みそうです。

ふくしま デステイネーション キャンペーンが開幕!

デステイネーション キャンペーンと東北

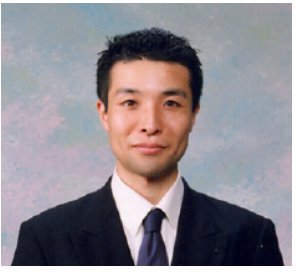
ふくしまデステイネーションキャンペーン「福が満開、福のしま」が4月1日開幕した。デステイネーションキャンペーン(以下DC)とは、県、地元自治体観光事業者等とJRグループが連携して行う国内最大級の大型観光キャンペーンで、1978年の和歌山県で開催された「きらめく紀州路」以来、今回の福島で94回目となる。

このうち、新潟を含む東北圏が対象となったDCは計33回と、全体のほぼ3分の1を占めている。東北はその観光資源の多さや、首都圏からの距離の近さなどから、観光キャンペーンの対象としやすい面があるのかもしれない。

福島が対象となるのは、1985年(この時は東北地方全域)、1995年、1998年、2001年、2005年に続いて6回目であるが、今回は何と云っても東日本大震災後初めてDCとあって、関係者の間には期するものがあるに違いない。

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagmas/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo>

屈指の桜の名所の多い地域である。福島はまた、スイーツが美味しい土地柄でもある。特に東北では山形と並んで「果樹王国」と称される通り、地元で取れる豊富な種類の果物を使ったスイーツが多い。そこに目をつけたJR東日本は今回のDCに合わせて、郡山から会津若松まで「フルーティアふくしま」という臨時列車を運行させる。「走るカフェ」のコピーの通り、車内ではコーヒーやフルーツジュースと共に、福島県産フルーツなどを使用したオリジナルスイーツが味わえるそうである。

充実した内容のガイドブック

ふくしまDCの開催に合わせて、JRの各駅などではふくしまDC総合ガイドブックが入手できる。見た目は普通のパンフレットのようだが、その実70ページにも及ぶボリュームの、まさにパンフレットというよりガイドブックと呼ぶに相応しい代物である。

内容も実に充実していて、これがあれば普通の観光ガイドブックはいらないのではないかと思われるくらい、福島県内各地の観光物産について詳しく紹介されている。しかも、定番のものを通り一遍に紹介するだけでなく、とどまらない。例えば会津のまんじゅうの天ぷらや喜多方のラーメン

ンバーガー、福島のイカ人参といったあまり知られていないご当地グルメや、船引のお人形様のような独自の風習、奥州藤原氏と源氏との最大の激戦地となった阿津賀志山防塁のような歴史上の遺構、相馬の百尺観音のような地元以外には知られていない文化財など、ある意味マニアックなニーズにまで対応できそうなレベルで紹介されている。ちなみに、このガイドブック、ふくしまDCのサイトでも電子ブックとして閲覧できるようにしている(<http://dc.fukushima.jp/yakudai/download.html>)。また、総合ガイドブックだけでなく、中通りエリアガイドブック、会津エリアガイドブック、いわきエリアガイドブック、相双エリアガイドブックなどもPDFデータとしてダウンロードできるようにしている。

ガイドブックに載っていない穴場的スポット

さて、このように詳細なガイドブックを作られてしまうと、私の出る幕などない、...のだが、ガイドブックに載っていない以外にもまだ、私の知っている穴場的なスポットがあるので、以下紹介していきたい。

・医王寺

福島市の飯坂温泉に向かう途中にある奥州藤原氏を支えた信夫藤原氏の菩提寺源義経に付き従って戦死した佐藤継信・忠信兄弟の墓碑もある。瑠璃光殿という宝物殿には佐藤氏ゆかりの品々が展示されているが、義経一行に関わるものも数多い。

陸奥国府が、南朝方の鎮守大将軍北畠顕家によって、攻めるに難く守るに易いこの霊山山頂に移されたことがあった。切り立った絶壁を下から見上げると、ここを攻めなければいけなくなった北朝方はさぞや難儀したのではないかと実感する。現在は遊歩道が整備され、そのような見かけとは裏腹に、登りやすい山となっている。頂上からの見晴らしもよく、また秋の紅葉の名所としても地元ではよく知られている。

・日山・麓山

これまたあまり知られていないが、富士山が見える北限の地は福島県である。現在までのところ、二本松市にある富士山から299km離れた標高1057mの日山、298km離れた標高897mの麓山(羽山とも)が、富士山を遠望できる北限の地とされている。

ちなみに、2つの山を挙げた理由は、富士山からの距離という点では日山の方が麓山よりも1km離れているが、緯度は麓山の方が日山よりも高く(つまりより北)、甲乙が付けにくいからである。

・霊山

中通りの福島市から浜通りの相馬市に向かう国道115号線沿いにある標高85mの山。直立する柱状節理が印象的な岩山である。あまり知られていないが、南北朝動乱期の一時期、多賀城の

・ UFOの里
福島市の南西部、飯野町地区は地元では「UFOの里」として知られている。地区の北部にある標高462mの千貫森周辺では古くから発光物体の目撃例が多数あるそうで、地区にあるUFOふれあい館ではUFOに関する資料の展示や3Dシアターでの映像の上映が行われている。UFOとは何の関係もないが、展望風呂やテニスコートもある。また、隣接するUFO物産館では地元産の土産品、民芸品の他に宇宙やUFOにかかわるグッズなども販売されている。物産館と同じ建物のパノラマ食堂では、UFOとは何の関係もないが、「ダブル地鶏ラーメン」と「飛び魚ラーメン」が人気である。

・ UFOの里のサイト

UFOの里のサイト(<http://ufonosato.com/>)には「UFOカメラ」というライブカメラもあり、居ながらにしてUFO探索ができる。

・妖精美術館

会津の金山町の沼沢湖のほとりには、妖精をテーマにした珍しい美術館がある。ここには世界中の妖精に関する絵画、絵本、文学資料、人形、妖精をとり入れた小道具などがたくさん揃っている。ただし、雪が深い冬季は休館しており、今年のオープンが4月28日の予定である。

・地ビール
ふくしまDC総合ガイドブックでは、福島県内の地酒については紹介されているものの、地ビールについては紹介されていないのが残念である。福島県内の地ビールについては以前「東北地ビール紀行」の中で紹介したが、福島市の「みちのく福島路ビール」、猪苗代町の「猪苗代地ビール」、二本松市の「ななくさビール」がある。みちのく福島路ビールと猪苗代地ビールには直営のレストランもある。出来立ての地ビールを樽生で飲むことができる。

・名誉猫隊長「ばす」

会津鉄道の芦ノ牧温泉駅には猫の名誉隊長がいる。元は近所の子供達が拾ってきた野良猫だったが、それ以来芦ノ牧温泉駅に住み、2008年に名誉隊長に任命され、乗降客の見送り、出迎え、駅構内外の巡回などに活躍中である。昨年には子猫の「らぶ」が見習い職員として就任、修行中である。

福島滞在に補助

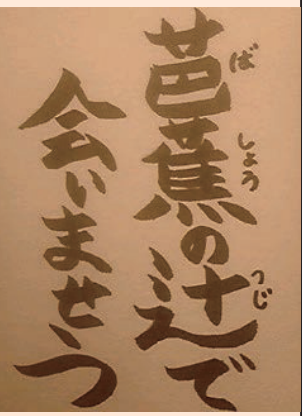
以上、ふくしまDC総合ガイドブックには載っていない、私の知っている福島県の穴場スポットについて紹介してみた。震災によって、東北を訪れる観光客数は減少した。福島県では震災のあった2011年は前年比で61.6%の3521万人にまで観光入込客数が減少した。その後2012年に4446万人、2013年には4831万人と観光入込客数は着実に回復してきている。

福島県は、観光入込客数の一層の回復を図るために、今回のふくしまDCに合わせて、宿泊代の一部を補助する「福が満開、福のしま」旅行券事業を始めようとしている。福島県内に滞在する観光客を対象に、ホテルや旅館で使用できる1万円分の宿泊クーポン券を、宿泊予約サイトやコンビニ端末を通じて半額の5000円で購入できるので、5000円分お得なわけである。事業開始はもうやうふくしまDCの最後の月である6月からになりそうだが、福島を訪れる際に活用してみてもどうだろうか。



「私が訪れた時ばす名誉隊長はお疲れでお昼寝中だった」

連載
むかしばなし



第二十三話
泉少年の神隠し

己が一族、平泉藤原家が阿津賀志山に張った、蝦夷の国と内裏の国の「境界線」。それと、トヨの存在が、どう関連するのだろうか。それについて、何故遠い七百年もの未来の人間である石川善助が、知っているのだろうか。

「石川殿・もしや、トヨ殿に会われましたか。」
善助は笑みを漏らし、頷く。
「伊勢堂山だ。君が来た時に隠れ潜んだ、台原の近くでさ。昨年、そこで林間学校があった。彼女は、そこ



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出だし演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当

の師範であったのださ。」
「りんかん・・がっこ？」
「街の子供らが、山や川で学ぶという新しい企画でね

「善助は話しながら、不自由な片足を杖も突かず、最大限に活動させながら忠衡が登って来た山道へ進んでいく。
「今夜は暖かいな・・こちらは秋だから、当然か。三郎さん、山を降りられるか宿はいいので、野宮の備えなどお借りできないかね。」
「野宮ですと。」

善助は、どんどん降りていく。興奮しているせいか口からは止む事なく、明るい声が飛び出し続けた。
「おお、ここから仙臺はよく見える・・昔も今も同じだな。何という、原野だ。ここにかの街を現出させるとは、何という力か！文明か！」

向山の麓、広瀬川向かいの暗い草原が、月明かりで淡く照らし出されていた。
「なぜ・・その女がトヨ殿とわかったのですか。」
忠衡が、話を戻す。
「ああ・・幼い頃に、見た事のある顔だと思った。そ

「何ですと!？」
その時、善助が大きく転倒して忠衡を慌てさせた。しかしたちまち起き上がり、何事もないように背筋を伸ばして今一度、眼下の原野を眺め渡すのだった。

「伊勢堂山のあるあの西北の丘陵から、この愛宕の向山を結ぶ線が、僕らが馬で駆け抜けた国分町通り。仙臺の背骨とも言える、僕が生まれ育った奥州大街道なのださ・・おおと、三郎さん、あれをご覧下さい！」
北西寄りの方向を指して

いた善助の指が、扇形に右に動いて北東に直る。
「あすこに灯りの群れが見えないか。仙臺駅の近くに当たるな・・おそろく、汽車だよ。時空を越えてきた。三郎さんの張った、境界の壁に乗っている。」
忠衡は溜息をつき、首を小さく振った。相変わらず

の調子だ、この人は・・芝居がかった言葉、その不思議な気迫にいつしか圧倒され乗せられてしまう。
あの時もそうだった。今から八年前、元服したばかりの自分が、青葉山で突如「神隠し」にあった時・・。

十五歳の忠衡が、馬で單身宮城野を南下し駆けていたのは、西国源氏の御曹司・九郎義経の一行を追っていたからであった。

義経は、忠衡が七歳の頃から仇敵平家の監視を逃れて平泉に身を寄せ、少年忠衡は才気溢れる武人義経を兄のように慕って育った。
しかし八年後、義経の兄・頼朝が平家打倒を掲げて伊豆にて挙兵、弟は呼応して平泉を発ったのであった。義経はその身を預かってきた平泉の主・秀衡の許可を得て発った訳ではなく、忠衡の追跡行もまた父に無断の行動であった。忠衡には義経を平泉へ連れ戻す気はなく、彼に従い平家打倒を助けるつもりであった。

ところがその途上の夕暮れ時、宮城野の原野に至った忠衡は、青葉山方面より押し寄せた霧に包まれ、気がつくとも見た事もない不思議な景色をもつ都市の中に立っていた・・それが、遙か未来、大正という時代にその地に存在するという町、仙臺だった。彼は、突如七百年もの時間を未来へ向け跳躍してしまったのである。

忠衡は、その幻惑の都市の大きな十字路の中に、馬上に跨ったまま呆然としていた。右に見た事もない異国風の塔が天高く聳え、左の豪華な建築は瓦屋根の頂きに龍の彫刻が踊っている。夜明け前なのか、ひと気の

ない時間帶らしく、朝の散歩中らしき青年が一人、こちらを興味深げに見上げている。それが石川善助だった。

ここはどこか？仙臺だ。君はどのもんだ、平泉の泉三郎だ・・としばし必然的な問答の果て、善助が言う。ここはまずいな、どこか郊外へ隠れましょう。そうですね、北がよござんしやう・・。不自由な片足をものともせず、勝手に忠衡の背後へ飛び乗ると、国分町通りという直線の道をカッポカッポと二人乗りで北上する。

何人か起き出してきた町の人らに驚かれるも、何とか北山へ至る。瓦を焼く工場が多いらしく暗いうちから煙の香りがしていた。
七百年前から、確かにこの地は瓦の産地であり、忠衡は間違いないことが国分ヶ原であると確信した。青葉という名の境内に馬を繋ぐと、そこで善助は話し始めた。
この境内が、この都を作った男を神として祀っている事。青葉山には、その男が作った城の跡がある事。平泉は、七百年も昔に滅びて寒村と化している事・・。

忠衡は何を話すべきか、迷った。何もかも変貌してしまったこの世界で、一体何を為せようのか。そもそも、なぜ自分はここへ来たのか。何者かが仕向けた性質の悪い魔術なのか。実は元服の際、初めて忠

衡は、父秀衡から自分が熊野の犬より授かった特別の生命である事を明かされたのである。とはいえ、幼い時分よりそれとなく、お前は鬼っ子さ、そこらの子らとは訳が違う、と仄めかしていた者がいた・・。それこそ、育て役の不思議な老婆、トヨに他ならなかった。

そうだ・・トヨだ。あの奇妙な婆様、自分は死ぬと十三歳のおぼこに還って、何もかも忘れて甦るのだ、そうやって幾百年、もしくは千年以上この世に存在してきたのだ、などと語っていた。ならば・・あの話の本当ならば、トヨはこの未来世界にも存在するはずいや・・大天狗に、トヨ。今回の件にこの奇怪な面々が絡んでいる可能性は高い、とも思われた。

躊躇われたが、この石川善助なる男にトヨの話をすると、善助は当然ながら驚愕の色に面を染めたが、トヨの名を、どういう訳かしきりに繰り返して吐くのだ。
「もしや、心当たりが？」
「いや、いや。まさか、でがんです。人が出てきた、森へ移った方がいいやも。」
はぐらかされた。この男、何か知っているのか。

台原という高台の森で、忠衡は平泉滅亡の詳細を善助から聞き出そうとしたが、それはお知りにならぬ方がよいのでは、とやんわり拒絶されるのだった。

その後忠衡は善助からこの時代の着物を借りて、馬は荷馬車を引く町の運送業者へ預け、自分は市民の顔をして街へ繰り出した。砂金を懐に持っていたので宿にも不自由しないのだが、善助は自らの家に彼を泊め、仕事を休んでまで側を離れずつくづく付いて回る。鉄道に驚き、自動車に驚き、自転車に驚き、ガス灯に、活動写真に、珈琲に、電話に、そして女たちの姿に驚くうちに時は過ぎるが、図書館なる荘厳な施設に興味を示すも、善助はそこにはどうしても行かせないのだ。この時代の文字がいかに読み難くとも、平泉の事は解つてしまおうと判断したのである。

ある日、忠衡は善助の前から姿を消し、独り図書館への潜入を図ったが、善助は門の前で執念深く待ち構えていた。彼は言った。
「どうしても、知りたいか。平泉の、最期について！」
*
眠り続ける筈でヤエトだった身体を今純三に託して、芭蕉らは青葉山の奥へ分け入っていった。といつても傾斜はまだ緩く、山岳のまだ手前のようなのである。「追廻しましょうか・・沼があります。ここを上がった所が、三の丸だったかと。」
芭蕉の声を聞きつつ、賢治は林の中を見回す。
「地理的には畑などあつてもいい所ですが・・ないとすると二の丸ができる、山

の北側でしょうか。ここで一旦の、お別れ・・。」
そこで一同、凍りついた。賢治の発した言葉の後ろが突然、聞いた事もない言語に変わったのである。
「○●◇×〒@+≡!」
「●:■♀・\$%@£?」
互いが互い、全く理解不能な言葉に聞こえ、意思疎通ができない。
「エスタス・ウルガ・」
その時、賢治が発した一言に、善助が反応して自らもたどたどしく怪しげな言葉を発する。
「チュ・ヴィ ポーヴァス パローリ・ラ エスベランタ」
「・・たまげだごんだ。」
壇老人が呟いて、最初の罫が解けた事がわかった。
「今のは、もしや。」
「エスベラントです・・。」
「そうです。善助さん、ご存知でしたか流石です。」
「しかし、なぜ解けたのでしょうか。」
「おそらく、この時代には存在しない言語だからでしょう・・世界共通語として、考案された新造言語ですから。」
「世界共通語・・ですか。壮大な夢でござるな。」
芭蕉がしみじみと言った。
「かの、アルバの古老が言っておった・・我らの話すガエリックこそ、古代バベルの塔で分離された、幾百の言語を再びつなぎ合わせた、至高の結晶なのだ。」
善助が目を剥く。
「バベルの塔・・ですと。」

ガエリックとは、一体。」
「貴殿方の時代というスコットランドの、古き言語です。拙僧の身に降りかかった、今に至る永き旅の宿命、その始まりの地、それがアルバなのです。」
賢治が、言い添える。
「地球の裏側まで・・跳躍されたのですよね。」
「宮澤殿のお話にもありましたろう・・合成された黒曜石を用いての、時空間を超越する旅。拙僧は・・遙か、遙か昔の、津軽のただの山男です。己が生まれ落ちた時代の寒き、荒き故地へ還りたいだけの、凡庸なる一人の蝦夷なのです。」
話しながら、芭蕉は賢治、善助の元から離れていく。
「早くも、大天狗に目をつけられましたな・・何卒お気を抜かれず。」
怪僧の姿は、たちまちのうちに夜霧に紛れ、沼の向こうに消えていく。
「ひっひっ・・ヂース・レヴィード、お二人さん！」
エスベラントで別れを告げられ驚く賢治と善助を残し、壇老人は芭蕉の後を小走りに追っていった。

次回予告
次回今純三、森の中にあるはずのない、「あの二人」の姿を見る・・ちなみに善助、忠衡の行った台原に、作者は八年も住んでいるのだった(それがどーした)

シリーズ 遠野の自然

「遠野の清明」

遠野 1000 景より

清明(せいめい)

清明といっても安倍晴明のことではない。文字も違う。これは二十四節の五番目、今年でいえば四月五日から四月二十日あたりまでの時節を指す。万物がすがすがしく明るく美しいころという意味であり、この時期には様々な



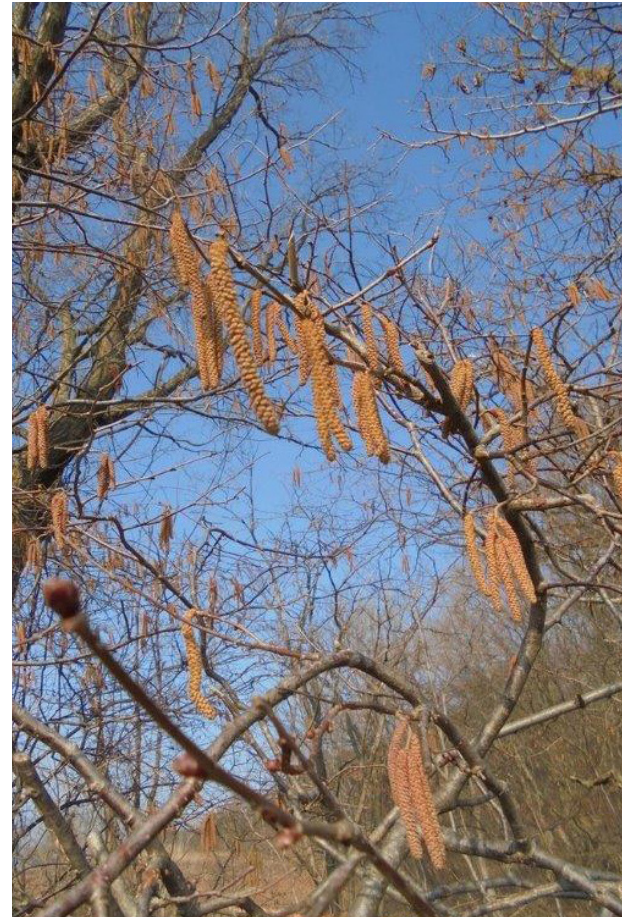
マンサク

花が咲き乱れ、お花見シーズンにもなる。

お花見といえば、今年の東京圏の桜の開花は予想以上に早かった。三月下旬に開花して、末頃には満開となった。四月に入り桜は散り始めた。葉桜状態になったところもあった。この号が発行される時期には、桜の花は跡形もなく

消えているだろう。

この新聞発行時には遠野でも桜が咲き始めているだろうが、四月初めはまだであった。それに完全に雪が解けてなくなっているわけではなく、降雪もまだまだ油断はできない。除雪機も出番があり、倉庫に格納



ハシバミ

するにはまだ早かった。

とはいえ、前号ではまだほんの気配にすぎなかった春は確実に到来した。融けた雪の下からフクジュソウが顔を出す。一面の雪の白から鮮やかな黄色が出現して、待ちに待った春の



ユキワリソウ

到来を告げるのである。

雪融けと花々

雪融けを合図に遠野では一斉に開花が始まる。ユキワリソウの白い小さな花がかわいい。撮影されたこのユキワリソウは、昨年、一昨年と、蕾のうちにかモシカに食べられてしまい、開花にこぎつけなかったという。三年目にしてようやく開花した。キンポウゲ科イチリンソウ属の多年草のアズマイチゲも白く華やかな花びらを開いた。

マンサクの花もかなり形状が変わっている。同時にまた名前の由来も変わっている。マンサクの語源は、春最



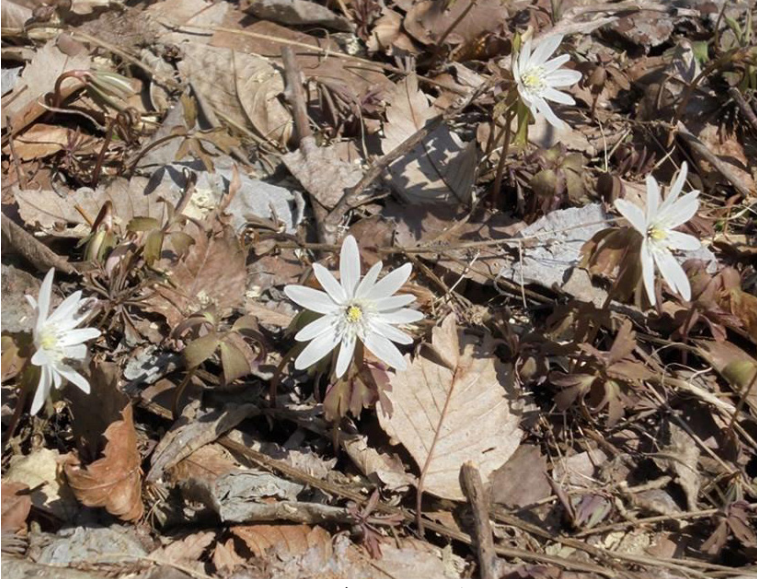
雪とフクジュソウ

初に先ず咲く「マツサク」から来ているようである。加速する春 遠野にとって、長い冬の



雪解け水

後の春は待ち遠しかったと思う。そして冬に比べれば春は短い。この短い春に一斉に開花する。まさに開花ラッシュである。雪融けの



アズマイチゲ

小川の水の勢いもすごい。開花ラッシュと雪融けがシンクロするのが遠野の清明という時節である。

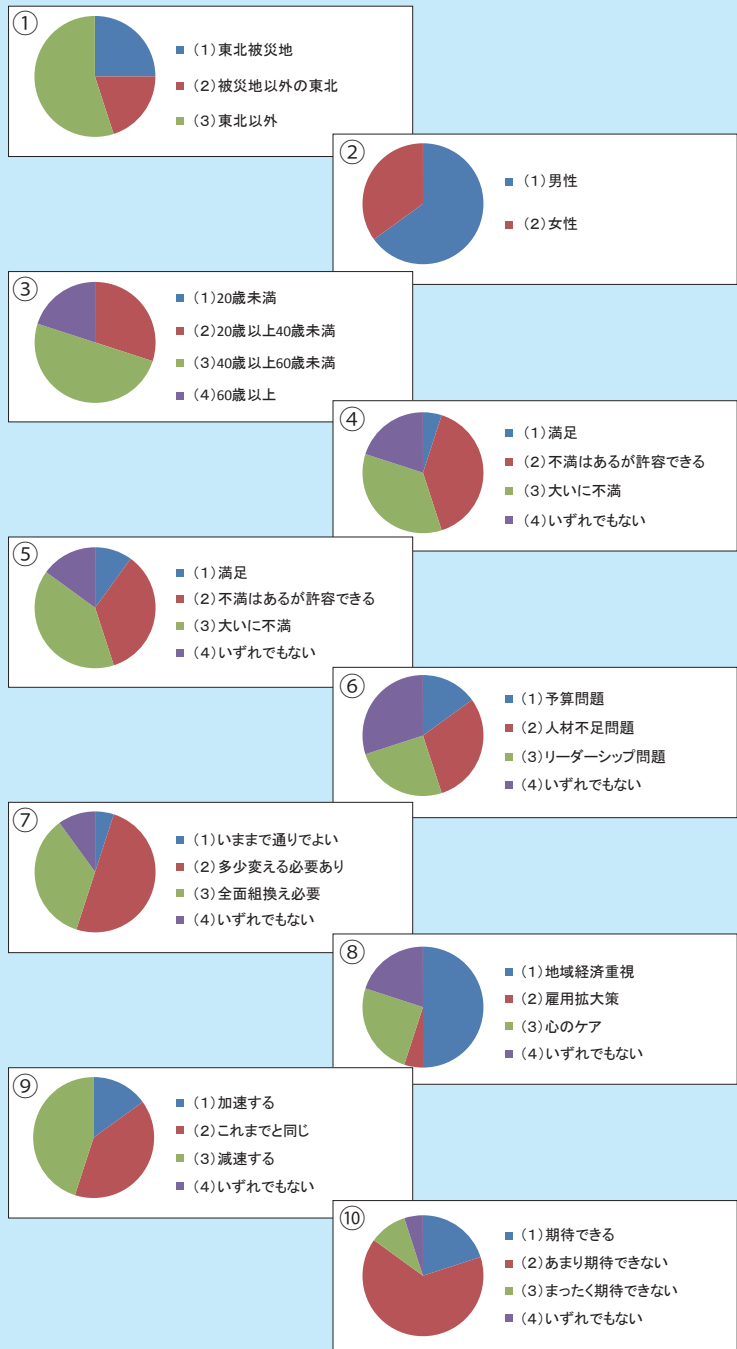


除雪

第34号 ネットアンケート集計結果

【あらためて震災復興のあり方を問う】

NO.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	5
	(2) 被災地以外の東北	4
②	性別	
	(1) 男性	13
	(2) 女性	7
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	6
	(3) 40歳以上60歳未満	10
④	過去3年間の復興総括	
	(1) 満足	1
	(2) 不満はあるが許容できる	8
	(3) 大いに不満	7
⑤	過去3年間の復興関連報道	
	(1) 満足	2
	(2) 不満はあるが許容できる	7
	(3) 大いに不満	8
⑥	過去3年間の復興課題	
	(1) 予算問題	3
	(2) 人材不足問題	6
	(3) リーダーシップ問題	5
⑦	4年目以降の復興枠組み	
	(1) いままで通りでよい	1
	(2) 多少変える必要あり	10
	(3) 全面組換え必要	7
⑧	4年目以降で復興枠組みを変えたら?	
	(1) 地域経済重視	10
	(2) 雇用拡大策	1
	(3) 心のケア	5
⑨	4年目以降の復興のスピード	
	(1) 加速する	3
	(2) これまでと同じ	8
	(3) 減速する	9
⑩	4年目以降の復興への期待	
	(1) 期待できる	4
	(2) あまり期待できない	13
	(3) まったく期待できない	2
	(4) いずれでもない	1



【訂正とお詫び】
先月三月十一日で東北大地震からちょうど満四年であり、質問は過去四年間、今後のことは五年目以降とすべきところ、それぞれ過去三年間、四年以降と記載してしまいました。訂正してお詫びするとともに、アンケートにはそこを読み替えてご回答いただいたものと解釈し、そのまま掲載いたします。謹んでお詫びいたします。

今回は【あらためて震災復興のあり方を問う】。回答者は女性多く、二十名。「過去3年間の復興総括」は「不満はあるが許容できる」と「大いに不満」が接戦でそれぞれ40%、35%。「過去3年間の復興関連報道」は「大いに不満」と「不満はあるが許容できる」が接戦でそれぞれ40%、35%。「過去3年間の復興課題」は「人材不足」、「リーダーシップ」、「予算」がそれぞれ30%、25%、15%。「4年目以降の復興枠組み」は「多少変える必要あり」がトップで50%、「全面組換え必要」が35%でした。「4年目以降で復興枠組みを変えたら?」は「地域経済重視」がトップで50%、「心のケア」が25%。「4年目以降の復興のスピード」は「減速する」が45%、「これまでと同じ」が40%。「4年目以降の復興への期待」は「あまり期待できない」が圧倒的で65%でした。

編集後記

今回の新聞では思い切った震災と宗教との関係に切り込んでみました。この問題は、なかなか微妙な問題を含み、かつ取り上げ方によっては、新聞の継続問題にも発展しかねない問題でしたので、読者の反応が気になるころではあります。端的に言えば、当新聞が、東北復興を具体的な宗教活動の方に誘導していくための手段ではないかと思われるか懸念しているということです。そんなことはけっしてございませんので、ご安心ください。

しかし、どうしてもこの問題を避けて通ることはできないという思いも大きくなっていたことは事実です。宗教問題と言うと、戦争責任とか歴史問題から、靖国神社参拝問題がすぐに思い浮かび、筆者の最近の神社通いも同類だと思われるかねないと思いつつの決断でした。でも記事を執筆してすっきりしました。いままでこの問題の周囲をグルグル回っていたと今では思えます。

最近では日常が縄文文化探索に熱中しています。そして、注連縄(しめなわ)にも興味を湧いて、挙句自分で注連縄を作ってみました。注連縄は縄文や古代宗教の名残りをとどめているとまじめに考えております。

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- プロジェクト募集要領
- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由(プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ 〆切はとくに設けません

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- 連絡先/企画提出先
(郵送) 〒207-0005 東京都東大和市高木3-315-1 ホームタウン宮前2-2 電子タプロイド新聞【東北復興】宛
(メール) yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
- ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと思ひます。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)
- たくさんのご提案をお待ちしています